

若手教員の資質を形成する「学校実習」の役割 —教師力向上実習と学校サポーターを比較して—

中妻 雅彦

教職実践講座

The Role of “Teaching Practice” in Improving the Qualities of Young Teachers —A Comparison of “Practice for Improving the Ability in Teaching” with “School Supporter” —

Masahiko NAKATSUMA

Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I 教職大学院の学校実習

中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(2012.8)やその後の「教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議」の論議は、民主党から自民党への政権交代を挟んで、論議が停滞しているが、国立教員養成系大学に対しては、修士レベルにおける質の高い教員養成を、教職大学院を軸とした組織体制に移行することが求められている。また、文科省は、「ミッションの再定義」を各大学に求め、国立教員養成系大学の存在意義にまで言及している。現在25大学に設置されている教職大学院を全県に設置するような働きかけも文科省から国立教員養成系大学に行われている。現在、教職大学院を設置してない大学の多くは、2～3年後の教職大学院開設に向けて準備が進められている。一方、私立大学まで含め、大きな影響のある専修免許状の取得における実践的科目の設置も論議され、学校インターンシップの導入が検討されている。

現在進められている教員養成の高度化は、教職大学院の学校実習(10単位)で行われている学校における長期の実習(学校実習)や導入が検討されている学校インターンシップ制度などにより、学校で起きる様々な問題に対応できる実践的な能力を身につけることが求められている。また、教職大学院では、大学における学修科目に、「教育課程編成・実施に関する領域」「教科などの実践的指導方法に関する領域」「生徒指導・教育相談に関する領域」「学級経営、学校経営に関する領域」「学校教育と教員の在り方に関する領域」の共通科目の設置が義務付けられ、これらの授業科目と学校実

習が「理論と実践の融合」を図り、高度専門職業人として高度な実践力と応用力を身につけた教員養成が目指されている。教員養成の高度化は、実践的な能力の形成が課題となっている。

一方、大学教員と実習校指導教員の協働や教職大学院の研究者教員と実務家教員の連携が十分ではなく、授業科目と学校実習の「融合」が満足できるほどではないという意見もあり、今後拡充されることが予想される教職大学院や専修免許取得に係る実践的科目の設置にあたり、克服しなければならない課題である。

現在、教員養成高度化の一つのモデルとなっている教職大学院の学校実習を、これを経験した教員の目から考察することによって、今後の教員養成の高度化にあたり、何が必要であり、何が問題となっているのかを明らかにしたいと考える。

2008年度に発足した本学教職大学院の学校実習は、以下のような内容が実践されている。

- ①学校サポーター(1年次9月から2年次12月までの月、木の週2日)
- ②教師力向上実習Ⅰ、Ⅱ(2年次の各4週間)
- ③教師力向上実習Ⅲ(2年次の1週間、メンター教員と共に実施)
- ④特別課題実習(1年次の4日間)及び多様なフィールド実習(2年次5日間程度)

授業科目は、火曜日に金曜日に開講されており、2年次は、担当教員による個別指導(ゼミ)以外、大学での学習指導はない。

学校実習の指導体制は以下のようになっている。

- ①学校サポーターは、月1回の訪問指導と大学でのゼミ指導を行う。

②教師力向上実習は、週1回の訪問指導、事前・事後指導と大学でのゼミ指導を行う。

③特別課題実習、多様なフィールド実習担当教員が訪問指導と事前・事後指導を行う。

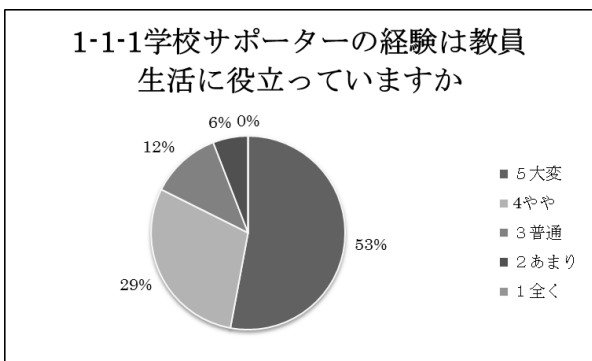
①②は、指導教員が2年間通して行い、修了報告書作成までの指導教員となる。本学教職大学院は、院生が修了報告書をまとめるための研究テーマを、1年次の学校サポーター活動から学んだ課題で作成することになっているため、教職大学院での学修に占める学校実習の役割は大変大きい。また、学校サポーターは単位としていないので、週2日、長期にわたって学校現場を学ぶ学校サポーターと集中的に学級経営や教科指導を実践する教師力向上実習（9単位）は、特徴のある実習形態であり、教員養成の高度化にあたって、どのような形態や内容での学校実習が望ましいのかを考察できる。

II 修了生アンケートから

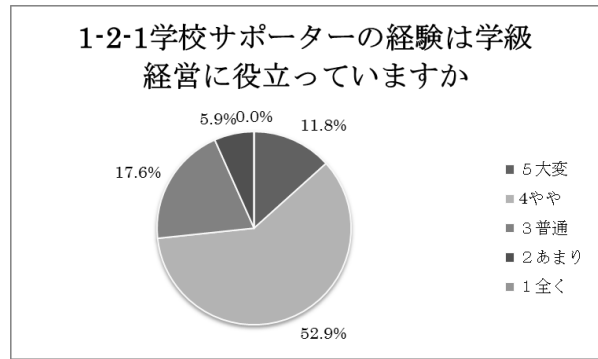
2011年度、2012年度の基礎領域修了生（ストレートマスター）に学校サポーターと教師力向上実習を比較するアンケートを、2012年8月～2013年2月に行った。回答者は、17名であった。

質問項目は、学校サポーターと教師力向上実習が、教職に就いてから「教員生活」「学級経営」「授業運営」「学校行事、学校事務」にどのように役に立っているかについて、5段階での評価と比較を行った。また、学校サポーター、教師力向上実習の具体的な成果や問題点について記述してもらい、集約した。

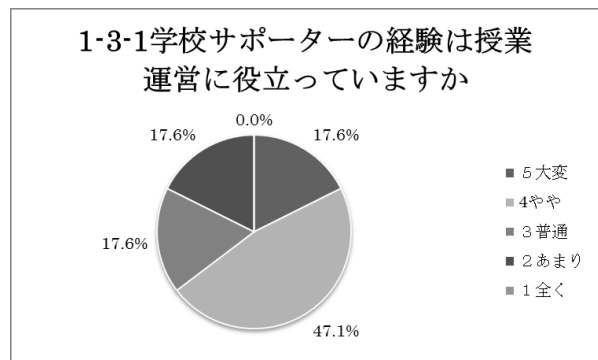
【アンケートのまとめ】



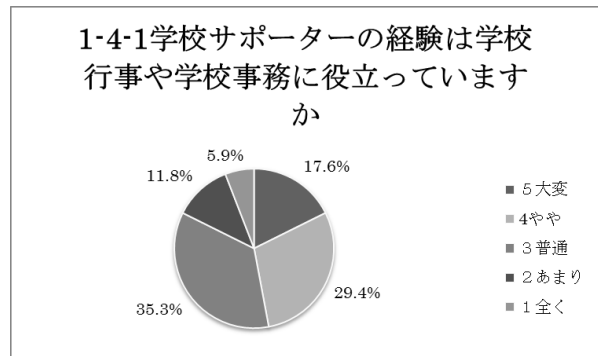
- ・肯定率82%で評価が高い。
- ・学校サポーターは、1年以上の長期わたることから、実習校の指導教員、管理職、若手教員などと親しい関係がつくられている。
- ・「教員生活」という言葉は、学校における教職員間の人間関係や管理職との関係などを想定していた。自由記述欄（後述）にもあるように、想定した内容と回答者との間の違いはほとんどなかった。



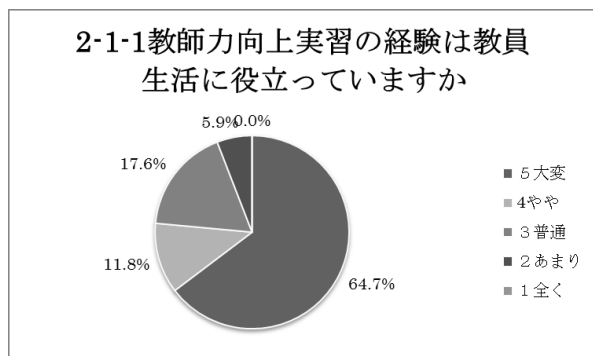
- ・肯定率64%。学級経営に役立つ活動となっている。
- ・長期にわたり、教室での学級経営実践を観察したり、子どもとの関係がづくることができている。



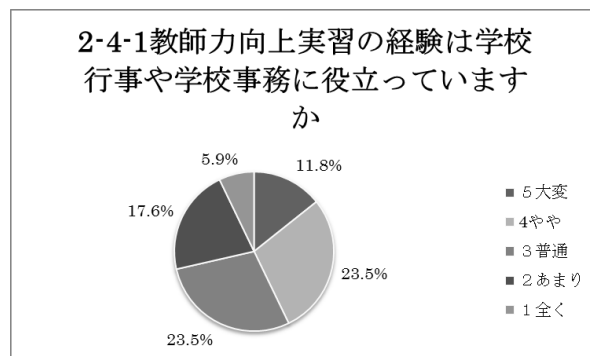
- ・肯定率64%。授業運営に役立つ活動となっている。学級経営との差はない。
- ・授業観察をいろいろなクラスでできている。



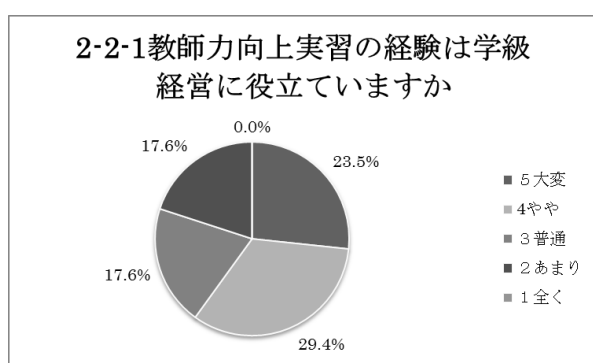
- ・肯定率47%で、学級経営、授業運営と比較すると肯定率は低い。
- ・年度当初を含む、忙しい時期の教員の仕事を学ぶことができると想定していたが、期待したほどではなかった。



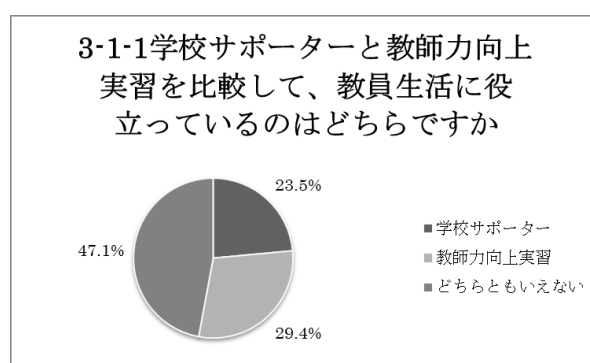
- ・肯定率76%。教師生活に役立っている。
- ・指導教員との関係が時間的にも、指導内容の面からも、密接となっている。



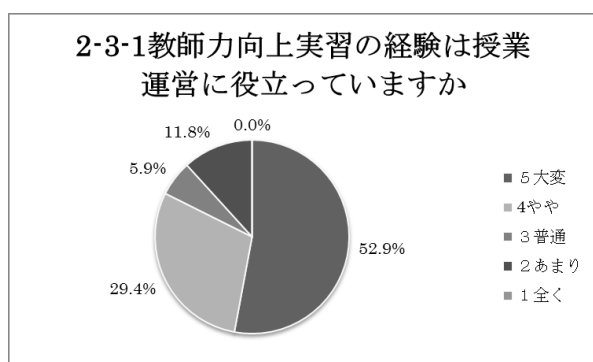
- ・肯定率35%。
- ・実習中に、運動会・学生会、遠足、社会見学、宿泊行事などが実施されたかどうかで、違いが出ている。



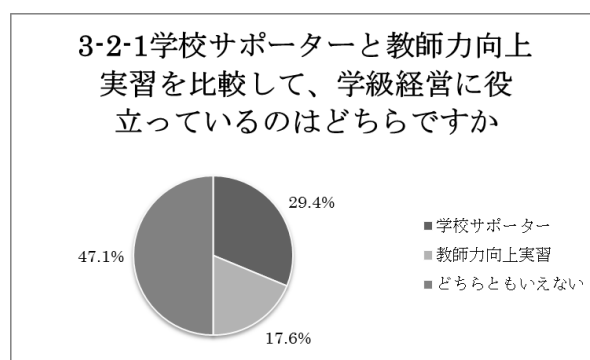
- ・肯定率53%。
- ・教師力向上実習Ⅰで、ほとんどの学生は、学級活動、朝・帰りの会の指導、学級通信の発行などを実践している。



- ・1-1-1と2-1-1を比較すると、肯定率では、学校サポーターが5%程度高いが、「大変役立っている」のは、教師力向上実習が、10%以上高い。
- ・教師力向上実習が、学校サポーター活動より6%程度、役立っている結果となっている。「大変役に立っている」という回答の反映であろう。
- ・指導教員との密接な関係が、教師力向上実習が上回っていることにつながっている。



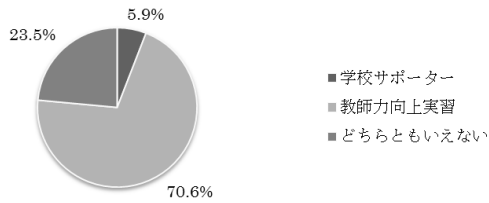
- ・肯定率82%。大いに役立っていると言えよう。
- ・教師力向上実習Ⅱは、教科を中心とした授業運営(小学校：複数教科1単元以上、中学校：複数単元)の実習である。



- ・1-2-1と2-2-1を比較すると、学校サポーター活動の肯定率が10%以上高いが、「大変役に立っている」は、教師力向上実習が10%以上高い。
- ・学級経営には、学校サポーター活動も、教師力向上実習も役立っているが、学校サポーター活動の方が、より評価は高い。
- ・子どもとの関係を長い時間をかけてみることができ

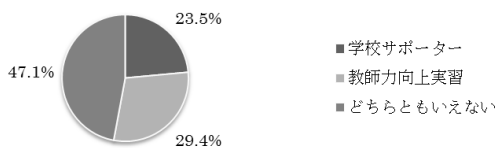
る学校サポーター活動の方が評価される。

3-3-1学校サポーターと教師力向上実習を比較して、授業運営に役立っているのはどちらですか



- ・授業運営は、教師力向上実習が「大変役に立っている」という回答が53%近くにのぼっている。
- ・授業運営には、教師力向上実習が大いに役立っている。
- ・教師力向上実習は、目的でも授業運営が明確になっている。

3-4-1学校サポーターと教師力向上実習を比較して、学校行事や学校事務に役立っているのはどちらですか



- ・1-4-1と2-4-1を比較すると、肯定率では大きな違いはない。「普通」という回答が、「学校サポーター」には多く、否定的に捉えられることが少ない。
- ・学校サポーターの期間には、学校行事等が必ずあり、週2回のサポーター活動でも、実習日を振り替えたリ、土日の行事に参加したりする機会がある。

これらのアンケート結果から、次のようなことが数値的に把握できる。

学校サポーター活動は、以下の3点である。

- ① 長期にわたる学校サポーター活動は、子どもの姿を継続して観察し、実践することができ、子どもとの関係を生かして、学修することができる。
- ② 学級経営は、学校行事等との関係も多く、長期の実習が有効である。
- ③ 多くの学級を参観し、教員の指導を多様に経験することができ、教員の個性を生かした実践を学ぶことができる。

教師力向上実習は以下である。

- ① 集中的な授業を中心とした実習によって単元計画を含めた実践を具体的に学ぶことができる。

- ② 毎日、授業実習をすることで、スモールステップで実践を改善することができる。
- ③ 複数教科（小学校）、複数単元（中学校）の実践をすることで、教科や単元を特性に応じた実践内容を学ぶことができる。

自由記述からは次のことを把握することができる。

学校サポーター活動は、以下の4点である。

- ① 教員生活、学校生活の見えない面を学ぶことができる。これは、各種会議への参加、生活指導へのかかわりなども含め、学校の教育活動を支える見えない場面への参加を伴っている。
- ② 2年目の実習への課題を明確にできる。集中的な教師力向上実習に、子どもとも関係、授業実践などの具体的な目標が持てる。
- ③ 長期にわたるサポーター活動は、失敗をてこにして、次への取り組みを再構成できる。
- ④ 教師でもなく、実習生でもないという子どもの近い存在として、学ぶことができる。

教師力向上実習は以下である。

- ① 集中的な授業実習によって、単元指導計画を含めた授業実践をスモールステップで学ぶことができる。1日目からの授業実践。
- ② 教職員、子どもとの距離が近い中で、実践できる。学校サポーターが事前にある。
- ③ 集中的な実習なので、指導教員、大学教員の指導も密であり、学びの実感がある。
- ④ 指導教員、メンター教員の指導が実践につながっている。

Ⅲ 教員養成高度化に向けた教職大学院の学校実習の在り方

中教審答申(2012.8)以後も教員免許法改正の行方が混とんとし、教員養成制度の改革も先行きの見えない状況となっている。しかし、修士レベルにおける教員養成では、教職大学院が軸となることは、文科省等も言及している。現在実践されている教職大学院の「理論と実践の融合」をめざした学校実習のモデルの一つとなる本学の学校実習の意義を修了生の生かし、さらに、実習指導を進めている教職大学院の現状から考えると、学校実習の改革に向けて次のような提案をした。

(ア) 週1~2日の長期(1年を目途とした)にわたる学校サポーターと課題を明確にした集中的な実習(教師力向上実習)のそれぞれの特徴を生かした学校実習の効果的な組み合わせが必要である。

(イ) 学校における行事や生活指導等の年間サイクルを考えると、ほぼ1年間の学校サポーター活動は、多くの教員の授業観察、多様な学級経

【修了生の自由記述を比較して】

	学校サポーター	教師力向上実習
1 男 小学校	教師になってみると、学校サポーターでやらせていただいたり教えていただいていたことはほんの一片にすぎないことが分かった。しかし、教員としての一日、一週間、一か月、一年間の流れや仕事内容を見ることで、大学時の教育実習に比べはるかに多く教員生活の内側を知ることができた。そのおかげで、次の仕事の予測を立てたり、見通しを持って行おうとする視点を持つことができた。	教師力向上実習では、長時間同じ学級の子ともと関わることで、一単元を習得していく様子や、内容と理解して自信がついていく子どもの変化を見ることができた。また、子どもの考えや悩みにもふれた。子ども理解や授業づくりの面において、子どもの小さな変化を捉えることの有効性を学んだ。特に本校の子どもは時間をかけて小さな変化をしていくため、一日の様子や些細な変化を見逃さないように心がけることができる。
2 男 小学校	継続して、学校現場に関わることで、事例から考える問題だけでなく実際の姿から課題を持って実習に取り組むことが可能となった。	一単元を通して授業を考え、行った経験は普段の授業に生きていると感じる。また、ビデオを撮ったり、板書を撮り、分析、反省するという作業もこの実習で学び、今も生かしている。
3 女 小学校	学生時代に現場を体験できたことで、子どもや教職員同士の関わり方について、目指したい理想像を持つことができている。	大学生の時の教育実習とはまるでちがいが、子ども、職員の方々に受け入れていただいている場でスタートできる実習の一日の濃さ、楽しさはすごく貴重な経験になった。
4 男 中学校	学年会議で問題行動をおこす子への対応など聞くことができていたため、現場でも戸惑いの少ない状態で会議に参加したり、対応しようと努めることができています。	サポーターは週2日だったので、自分の指導も途切れ途切れ、先生方の指導も同じで歯がゆさを感じていた。
5 男 中学校	サポーター時に多く失敗したことで、現場ではいけないことや、積極的にすべきことが少し分かった。(授業や生徒対応など)	自分の学級を経営することと、サポーター校の学級で実践することでは、全く責任感や重さが違う。役立つ部分もあるが、参考程度に留めないと場面に対処できない。
6 女 中学校	サポーターで「こんなことをやりたい」と思っていたことがなかなか実行に移せず苦戦中です。見るのとやるのは違うなど実感しましたが、サポーター活動を通して目指したい学級像が自分の中で少しもてました。	教師力向上実習Ⅰでは、四月の学級経営の重要性に気付かされ、私も四月の学級経営で力を入れることができました。今にして思えば、私のした実践が未熟なものであったと感じています。
7 男 小学校	「教師」ではないので子どもたちとの距離がちぢめやすく担任の先生とはちがった話を聞けたり、対応したりできた。が、今は担任という立場での立ち位置が難しいこともあると感じる。この経験が良くも悪くも働いているように思う。	1単元を全てまかせていただき、自分の実践をメンターの先生に修正していただきながら進めることができた。子どもたちに合わせて内容や方法を工夫する大切さを知ることができた。
8 女 小学校	学校サポーターでは、学級集団を育てる教員の働きかけや、トラブルが起きた際の個別対応と全体対応などについて学んだ。現在では、子ども一人一人と教員との関わりはあるが、子どもに友達や学級集団の認識はまだないのが実態である。また、私自身、特別支援学校での学級経営について再考していく必要があるため、まだ十分に学級経営を行えているとは言えないと感じている。	指導の担当教員に、毎時の授業について綿密に助言をいただいていた。そのおかげで、子どもの実態に適した授業づくりを目指すことができ、自信を持って授業を行えた。この経験は、子どもの実態を捉えて授業内容を考え、一人一人の到達の見通しを持って単元を考える現在の基盤になっていると思う。また、授業ごとに指導案をつくるため、指導案作りのコツが非常に参考になっている。

営・生活指導の取り組み、学生と子どもとの関係づくり(コミュニケーション)を中心とした実習として取り組む内容を明確にした活動とする。

(ウ) 集中的な実習を行う教師力向上実習は、毎日実践される授業運営、課題を明確にした学級経営を中心に、実習期間も整理し、より充実した活動にする。

(エ) 実習校の指導教員には、中堅教員が少ないという現状があり、指導教員の指導力量を大学が支援する必要がある。大学教員と実習校指導教員の協働を進める。この指導教員に、応用領域(現職教員)修了生を活用することを検討する。これにより、修了後の大学としての支援にもつながる。

大学としてすぐに学校実習カリキュラムの改善に取

りかかれる内容は、今後論議を進めることが可能である。一方、教育委員会・連携協力校等との協議が必要なこともあり、これらは、教員養成をどのように進めるのかという基本方針が明確にならないかぎりお互いに検討することも困難ことでもある。しかし、教員養成の高度化、教職大学院がその軸となるという方向から考えれば、検討を開始することに遅れがあってはならないであろう。

(2013年9月27日受理)